拘留理由開示公判における組合側の意見

保安を守るのは組合
ただちに全員釈放せよ

六月十七日の宮浦鉱鉱長室への機動隊導入以来、なお拘留をつづけられている四名（古賀書記長、立山労仂部長、中屋宮浦指導部長、藤沢宮浦指導部長）にたいする拘留理由開示公判は、六月二十七日、七月一日の二回にわたって開かれたが、以下はその公判における組合側の意見陳述である。（発言順）この公判で裁判所は、弁護士や被疑者、請求人にまで退廷を命じ、大牟田署に機動隊を待機させるなどまったく「権力による階級裁判」としかいいようのないものであったが、不当逮捕をつづけられていた四名や、二名の請求人（谷端副組合長、安達指導部長）および弁護団は、鋭く徹底的に検察や会社の意図をバクロした。

保安を守らせることが なぜ刑事事件になるのか

請求人谷端副組合長の意見＝この事件は同じ宮浦鉱の江上、井上両君の不当逮捕からはじまっている。この両君は会社の保安上のおちどを追及したことを理由に逮捕されたのだ。

ところが検察庁は同じ保安問題で、しかも四百五十八名の死者と八百名にものぼるCO患者を出したあの三川鉱大爆発をおこした責任者を拘束さえしきらなかった。この大量殺人を放置し、保安を守らせようとした組合活動家を罪人あつかいするとは全く逆である。

とくに藤沢さんの取り調べにあった検事が、「黙否すれば不利になる」とか、「黙否すれば、もう保安のことなど要求されなくなるぞ」と恐迫している。これらは、われわれが保安法を守らせれば刑事事件になることが明らかになった。不退去罪という罪名がつけられている。それならば九日になぜ鉱長室に抗議に行ったのかを明らかにしよう。

九日宮浦鉱繰込場で担当係長は組合員の質問にたいして、「鉱長にきけ」といった。だからみんなは鉱長室に行ったのだ。しかし鉱長は何の返事もせず、みんなは返事を待っていたのだ。それを不退去罪とは全くいいがかりにすぎない。

とくに立山労仂部長は十六日までは高島炭鉱に出張しており、十七日に機動隊導入の報をきいて鉱長室に入ったのだ。これは組合幹部として当然の行動だ。それを逮捕するとは何事か。書記長、労仂部長が不在で組合は大きな支障をきたしている。拘留の理由はなく直ちに釈放してもらいたい。

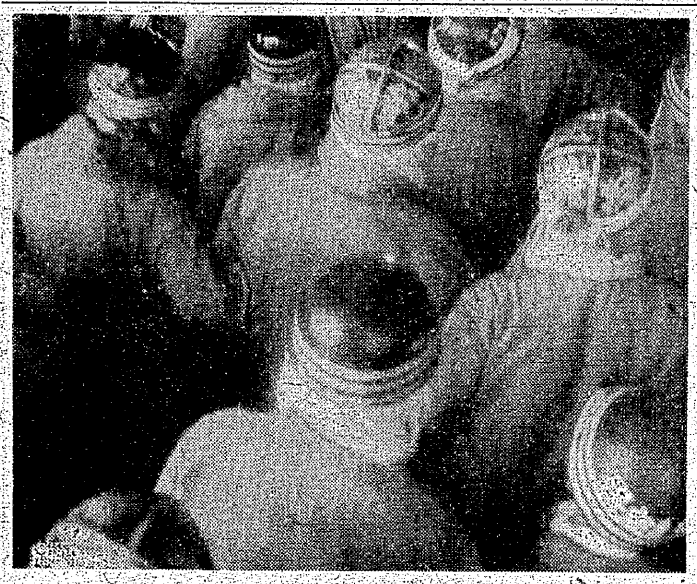
誠意なき会社 側こそ罰せられねばならぬ

請求人安達指導部長の意見＝あの三川大爆発以来、六十三名が殺され今年になってもすでに六名も殺された。保安が守られないのは生産が上がらないからだ。だから保安を守らせようとする者にたいするデッチ上げ事件が四月二十八日の宮浦鉱繰込場事件であった。

座り込み中も中屋指導部長は何回となく会社側に電話で交渉を要求したが、ついに会社側は交渉に出ず機動隊を導入した。会社側はなぜ自ら話し合いに応じ、解決しようとしないのか。

また機動隊の暴力行為と二十一名の大量逮捕ということは全く納得がいかない。暴力を振った警察官こそ拘置所に入れられるべきだ。

とくに四名の拘留が認められたことは納得が出来ない。とくに宮浦指導部は二名の指導部長が拘留されたことで大きな混乱をおこしている。三池労組の保安闘争は大きな支障をきたしている。直ちに理由のない拘留をやめていただきたい。



われわれは生命を守るために立ち上がった!!

岩につぶされて死ぬ
労働者の姿を知っているか

藤沢指導部長の意見＝会社の保安サボで労仂者は坑内で大きな岩の下にしかれて死んでいくのだ。この残酷さは実際見た人でないとわからない。

保安を守れというと転員は「労使間でしてくれ」といい、組合として話をすると、「現場で処理してくれ」という。保安問題がそのようにおろそかにされているとき、われわれは一体どうしたらいいのか?

私に対する検事の取り調べは全く違法の一言につきる。検事は裁判官に、私が証拠隠滅のおそれがあるといっている。理由は私が執行委員だからという。組合の執行委員には組合員の信頼があるのは当然であり、それが証拠隠滅の理由ならば、それは組合活動への介入ではないか。

会社幹部こそ逮捕せよ

中屋指導部長の意見＝率直にいって今回の逮捕は相手をまちがえている。今回の問題の根本は保安問題であり、まして組合と会社の交渉の席上、江上、井上問題について樋口副長は刑事事件にしないことを約束した。これは組合、会社のそれぞれの事実調査の結果がくいちがったからである。ところが六月九日の二名の逮捕はこのような労資間の慣行と信頼をふみにじって、樋口副長が警察に通報し、その一方的な資料をもとに警察が不当逮捕したものである。このような背信行為を行なった三井幹部のウラ切りこそ罰せられるべきである。

二度と大爆発を おこさぬ努力を弾圧

古賀書記長の意見＝今回の事件がなにからおきてきたのかをのべたい。三池労組の組合員は二度と三川大爆発をおこさないために毎日真剣に闘っている。最近は岩粉さえ会社がふらず、手を抜いている。三池労組員はつねに保安規則通り岩粉をまけと抗議をつづけている。ところが会社はこれに耳をかすことなく生産第一主義を強行し、そればかりか自らの生命を守る行動を弾圧してきた。これが今回の紛争の原因であり、人間として生きる上で当然の要求を弾圧してきた会社の態度を直さなければならない。

生命を守るのは労仂組合

立山労仂部長の話＝この世の中で一番大切なことは、生命を守るということだろう。そういう意味で三池の組合の歴史を話したい。

われわれの組合は、かって、ねむれる豚といわれていた。昭和二十八年ごろから、仂く者の生命は自分の力で守る以外にないとして立ち上がっていった。炭鉱労仂者は危険な坑内でつねに生命の危機にさらされている。主婦は、主人の帰りがおそいときは、また事故がおきたのではないかと心配するほどである。われわれの闘いの発展、組合の強化によって昭和三十四年ごろには一年に一名の死者しか出ないほどに保安状態は改善されていった。ところが昭和三十五年、総資本対総労仂といわれた三池闘争で千二百名の活動家がクビ切られ、組合が分裂させられて以来年間十六、七名もの死者が続出し、ついに昭和三十八年の三川鉱大爆発にまでつながった。この大量虐殺、連続殺人はベトナムの戦争にも匹敵するものであろう。歴史的にみても保安は組合が守るものであり、会社はつねにこの組合運動を弾圧してきた。生命を守る運動をなぜ弾圧するのか? 理由のない拘留を直ちに中止せよ。

四山鉱でガス湧出
まかりまちがえば大災害

去月二十五日午前八時三十分ごろのこと、四山鉱一五〇メーター坑道につらなる払で、ガスの異常湧出が検出され、全作業員が作業を中止して退避する騒ぎが起きた。

払い跡にたまったメタンガスや炭酸ガスが、坑底の気圧の低下にともない作業中の払いにまで湧出してきたわけで、転制の手により検出されたからよいものの、大切なガス検定が怠られでもしていたら、とんだ大災害になりかねないところだった。

ガス量は、一番濃度の高かったときに三・五%にまでも達したというが、このときは転制の指示により、火花が生ずるような部分の作業などサッと中止したので、ことなく済んだのだった。

坑道の気圧低下の原因は、梅雨期に避けられぬ低気圧気象によりひき起こされたものと見られるが坑内保安は余程注意が必要なことを、こんどのガス湧出はよく教えている。

私の書棚

突きささるその怨念
呉林俊著『記録なき囚人』

これは戦中を生きた朝鮮人による被害の記録である。被害というのは、日韓併合という歴史的転換のときから朝鮮人が受けねばならなかった政治的宿命とつながっている「心の痛み」である。そのことによって、われわれは加害者の位置に立つのである。

呉林俊は昭和五年に慶尚南道から父母とともに神戸にわたってきた。そのころの少年期の「はじき出されていた」状態を、みずみずしい記憶によって再現している。まず第一部「少年の幻影」は「差別を超えたい!」「偏見と冷嘲を逃れて」「神はいずこに」「いつとはなしに日は暮れていく」という各章の題名によってもわかるように、痛む心をこま化そうにもどうするすべもなかった体験が書きこまれており、それが軍隊にいくと、神戸での庶民のなかのくらしとはもっとちがう観念の攻撃によって、さらに虐待されるようになる。第二部の「皇民の幻影」でそれが告発された。とくに「朝鮮人が「日本軍兵士」として朝鮮に駐屯するという悲劇を、かれは「政治」（国家）の問題としてとらえ、それを政治論のような出し方をせず、黙々と、あくことなく生活の告白の形をとってわれわれに朝鮮人の怨念をつき出してくれた。

しかし、怨念をそれ自体として目的化せず、それを生んだ政治構造の本体にむかって告発するという態度をとったことが、この本を一そう重く、論理的なものにおしあげたようだ。われわれはここでは「告発される側」に立つことになるが、自伝の形式をとって、しかも生活の深層をえぐってみせられると、一個の人間を核にしつつ動いている情況の総体が生きいきと迫ってくるので、いつの間にか作者の内部にはいりこみ、被害の痛みをともにすることができるようにもなるという奇妙な関係に立つ。現代日本の民衆の位置を確認してみることもできるラジカルなテキストでもあるといえよう。

（松永伍一）　さんいちぶっくす　二五二頁　三五〇円

「暴力反対」ブームだが

政府・自民党は国会に〝暴力排除〟の決議案を超党派で提出しようと画策していると新聞は報じている。〝暴力主義〟のレッテルはりが左右を問わず流行している今日このごろだが、政府・自民党が〝暴力排除〟を国会で決議しようとは盗人たけだけしいといわねばならぬだろう。

▽〝暴力学生排除〟の左右のキャンペーンは昨年後半から今年にかけての国民の間に浸透したようだ。このキャンペーンは〝解散近し〟の政治の季節のなかで党利党略にも大いに活用されもした。「学生の暴力には困ったものだ」が日本の平均的常識人ということにもなった。

▽そういう風潮のなかで機動隊の暴力がエスカレートし、これに正面から抗議する組織的な声がおきない。むしろ、機動隊の〝暴力〟に頼って学生運動を駆逐することを期待するような退廃現象さえ反体制の内部に生ずるにいたった。

▽「暴力反対」のくり返しもいいが、いつの間にか権力の側と声をあわせて合唱していたという喜劇を演じては困る。

（労仂ニュースより）